聖恋学院学園祭

Vol.2

原作:　　フルーツ牛乳２(リットル)
イラスト:ゆーちん

プロローグ

聖恋学園の朝は早い。ふみかは水泳部の朝練をプールで行っていた。朝練ながらも厳しいメニューをこなし終えたふみかは、どことなく嬉しそうな表情を浮かべていた。他の部員達は、そんなふみかのことを不思議に思いながら声をかけた。

「どうしたのよ、ふみか？　今日、やけに嬉しそうじゃない」

「えっ？　べっ…別になんでもないわよ！」

ふみかは頬を赤く染めながら答え、練習を終えシャワー室へと向かった。

彼女が嬉しそうにしていたのは昨日の出来事を思い出していたからだ。昨日の放課後、プールで軽音部員の拓哉の悩みを聞くうちに打ち解けていき、そして結ばれた。

女子生徒のファンが多い拓哉を独り占めできた優越感。まだ自分の身体に残る、拓哉のものと膣内に発射された液体の感覚。ふみかは鼻歌交じりにシャワーを浴び終え制服に着替えると、拓哉がいる1年B組の教室へと戻った。

「おはよう、ふみかちゃん」

「あ…おはよう、拓哉君」

教室へ戻ると、拓哉がふみかに声をかけてきた。彼女もそれに応え挨拶する。今までとなんら変わらないことだが、昨日のこともあり、二人ともやや照れながら声を交わした。
急に距離が縮まった感じの二人の姿に、周りの女子生徒達も不思議そうに噂した。

「ねえねえ、あの二人、急に仲良くなってない？」
「ホント。まるで付き合ってるみたいね」
そんな周囲の目にも気にすることなく、二人が話しを続けていると、一時間目が始まる前のチャイムが鳴った。一時間目は学科ごとの移動教室である為、ふみかと拓哉は別の授業になる。
「じゃあね、拓哉君。曲作り頑張ってね」
「ふみかちゃんも、学園祭の仕事頑張って」
そう言うと、ふみかは移動教室用のテキスト入れを持ち、笑顔で教室を出て行った。晴れやかな気分で廊下を歩くふみか。と、そんな彼女に声をかけてきた人物がいた。
「おい、空木」
「…え？」

彼女に声をかけてきたのは、1年A組の風間勇樹。ふみかと同じく、学園祭の学年担当委員長になった男子生徒だ。

「あ、風間君。おはよう。どうしたの？」
「どうしたの？　じゃねえよ！」
勇樹はふみかの顔を見るなり、急に彼女に対して怒り出した。
「昨日の放課後、部活の練習終わったら戻って来るって言っておきながら、結局帰っただろ？」
「あっ！　忘れてた！　ゴメン！」
昨日の放課後、学園祭の委員である二人は、視聴覚室で学園祭に使用するペーパーフラワー作りに取り掛かっていたのだが、途中でふみかは水泳部の練習に行くために作業を中断した。そして、勇樹に残りを任せプールに向かい、練習が終わってから戻ると言ったのだが……練習後のプールで、拓哉との甘いひと時を過ごしてしまい、勇樹と委員の仕事をしていたことをすっかり忘れていたのだ。
「ゴメンじゃねえよ、ったく！」
「べ…別に風間君だって、今まで委員の仕事を私一人に押し付けてサボってたんだから、お相子でしょ」
「なんだよそれ。とにかく、ペーパーフラワー全部作って実行委員のところに持ってったから」
「あ……ありがとう」
「じゃあ、また放課後な」
勇樹はそう告げると、自分の授業を受ける教室へと去って行った。サッカーをやっていた時

よりも寂しそうな彼の後姿を、ふみかは少し心配そうに見送るのだった。